

令和 2 年 6 月 24 日現在

機関番号：30121

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2017～2019

課題番号：17K12413

研究課題名（和文）小規模ケアホームにおけるケアの質の保証可能な実践的ケアマニュアルの開発

研究課題名（英文）Development of a practical care manual that can guarantee the quality of care in a small care home

研究代表者

長内 さゆり（OSANAI, SAYURI）

北海道文教大学・人間科学部・准教授

研究者番号：80783555

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,600,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、小規模ケアホームを全国で展開しているホームホスピスの管理者（開設者）及びスタッフを対象に、ケアの質を担保するための取り組みについてインタビューを実施し、質的帰納的分析を行った。管理者のインタビューでは、12のカテゴリーから3つにラベル化され、スタッフのインタビューでは、18のカテゴリーから3つにラベル化された。ラベル化された内容とペタゴギックの「究極の個別ケア技術」と既存の「ホームホスピスの基準」を参考に小規模ケアホームの質を保証するケアマニュアル開発に向けて検討した結果、「個別ケア技術の意識化」と「小規模ケアホームの管理者のゆるぎない理念とビジョン」が重要視された。

研究成果の学術的意義や社会的意義

少子高齢化が進み、2025年には、高齢化率30%を超えると推測され、3.3人に一人は高齢者という時代となる。高齢者世帯の増加が見込まれ、自宅での生活困難者が増加し、施設等に暮らしの場を変更せざる得ない状況となりうる。しかし、施設等では、質の良いケアが担保されにくく、高齢者にとって居心地が良いとは言えない状況も発生する。本研究における「ペタゴギック」を踏まえたケアマニュアルの作成は、高齢者ケアの本質を見直し、ケアの質が担保・保証される結果となり、高齢者が安心して終の棲家として居心地の良い生活が続けられることに繋がる。

研究成果の概要（英文）：In this study, administrators and staff of small care homes that provide home hospice care throughout Japan were interviewed about measures in place to ensure quality of care, and the results were analyzed qualitatively and inductively. Twelve categories were extracted from the administrator interview results, and 3 labels were assigned to those categories. Similarly, 18 categories were extracted from the staff interview results, and 3 labels were assigned. The labeled results were assessed using the pedagogic “ultimate personalized caregiving technique” and the existing “home hospice criteria” as references to develop a care manual that ensures the quality of small care homes. “Consciousness of personalized caregiving techniques” and “firm idea and vision held by administrators of small care homes” were shown to be important.

研究分野：在宅看護学

キーワード：小規模ケアホーム ホームホスピス ペタゴギック ケアの質

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

我が国の高齢化は急激に進み、2015年10月1日現在、65歳以上の高齢者人口は3,392万人、高齢化率は26.7%であり、2025年には高齢化率が30%を超えと推測されている。これまでの高齢化の問題は、高齢化の「速さ」であったが、今後は、高齢化率の「高さ」が問題となる。A地域における高齢化率も2025年には34.6%を迎えようとしている。高齢化の増加に伴い、高齢者の疾病の罹患率や要介護率も上昇し、特に認知症高齢者の急増が予測される。しかし、病院の機能分化が進み病院完結型医療から地域完結型医療へ変化し、退院を余儀なくされた高齢者は自宅へ退院となる。しかし、高齢世帯や高齢者の単独世帯の増加で、自宅へ帰ることができない高齢者は、介護保険施設や居宅系の高齢者向けの住宅等に住まいを移している。地域には高齢者向けの住まいが大小の規模を問わず散在しているが、身体拘束や介護放棄に近い状況等の問題点も多く、ケアの質が担保されていない現状である。建物は立派でも中身が伴っていない、スタッフが頻回に変わり、安心して介護を依頼できないなど様々である。

国が推進している地域包括ケアシステムにおいて、「本人の選択と本人・家族の心構え」では、本人にとって「最善」を優先することであり、「住まいと住まい方」では、居場所と団欒の提供であり、「生活支援」では、生命を維持するのみのケアから意欲を引き出すケアへ、「医療・介護・予防の一体的な提供」では、介護職は医療的マインドを持ち、医療職は生活を支える視点を持ち、かかりつけ医と多職種連携である言われている。

研究者は小規模ケアホームであるホームホスピスに発足当初から関わり、ホームホスピスで訪問看護ステーションを立ち上げるために一年間、管理者として関わった。訪問看護師としてホームホスピスに関わり、介護スタッフのケアの実践、各入居者のかかりつけ医、介護支援専門員、訪問看護師等と家族との関わりを身近に経験した。

2004年にホームホスピスは、地域活動から誕生し、全国に展開している。2017年には、ホームホスピス協会に認定されている団体(会員)は25ヶ所であり、ホームホスピス協会は、「ホームホスピスの基準」を作成し、「ホームホスピスの理念を実現するための基本条件」、「ホームホスピスケア」、「ホームホスピスの運営」、「スタッフの人材育成と管理」、「安全管理」の5つの大項目の中にそれぞれ中分類、項目、判断基準を作成し、質の担保に務めている。さらにホームホスピスでは、開設当初、デンマークにおける高齢者ケアを経験した介護スタッフがデンマークで取り入れられている「ペタゴギック」(個々の人間性・個性を見抜いてそれに合った対応をする究極の個別ケア技術)の手法を導入していた。

ホームホスピスでは、ケアの成果として入居者がその人らしい生活を取り戻し、全身状態や表情等が良い方向に変化し、穏やかな環境の中で日常生活を続けていた。この良い変化をもたらした「ケアの本質(ケア方法およびケアそのものに対する認識)」は何かと疑問を感じていた。

小規模ケアホームであるホームホスピスで働くスタッフの死生観と終末期ケアに対する認識の変化についての研究は行われているが、ケアの質担保に関わる研究は見当たらず、探求したいと考えた。

2. 研究の目的

- (1) デンマークで取り入れられている「ペタゴギック」について理解し、ケア質担保への示唆を得ること。
- (2) ホームホスピスで働くスタッフおよび管理者(開設者)のケアに対する認識(思いや工夫)と質を担保するための取り組みの現状と課題からケアの本質を明らかにすること。
- (3) 他の小規模ケアホーム等の施設でも応用可能なケアの質を保證できるマニュアル開発に向

けて検討すること、

3. 研究の方法

(1) デンマークを訪問、研修・視察と日本において講演会の開催

「ノーフュンスホイスコーレ」における短期研修で「ペタゴギック」についての講義を受講し、ペタゴギックを展開している保育園、高齢者集合住宅と地域看護クリニックを視察から情報を収集した。

デンマークの「ノーフュンスホイスコーレ」から日本人講師を招き、デンマークのケアと教育についての講演会とホームホスピスの開設当初にケアに関わり、「ペタゴギック」を展開したデンマーク在住の介護士と全国ホームホスピス協会の理事長を招き、ホームホスピスのケアの実践についての講演会を実施し、視察後の知見を確認し、学びを深めた。

(2) インタビュー調査

全国ホームホスピス協会からインタビューに協力可能なホームホスピス 5 か所の紹介を受け、研究の主旨の説明と協力を文書で依頼し、同意を得られた管理者（開設者）5 名およびスタッフ 13 名を対象に半構造的面接を 1 時間前後で実施した。インタビューの内容は、管理者に対して、ケアの質を担保するための取り組みを中心に実施し、スタッフに対して、入居者に対する思いやホームホスピスへの思いとケアを行う上で大切にしていることを中心に実施した。

分析方法

インタビューは同意を得て録音し、管理者とスタッフのインタビューの内容を逐語録とし、管理者とスタッフにそれぞれ区別し、質的帰納的分析を実施した。

倫理的配慮

インタビューを実施する上で、研究への参加は自由意思であること、研究協力に同意しなくても不利益を受けることがないこと、同意した後でもいつでも不利益を受けることなく撤回することができること、インタビューの内容を録音すること、データは匿名化し、個人が特定できないようにすること、研究終了後 10 年間保存し、その後全てのデータを削除・破棄することを文書と口頭で説明し、同意を得た。札幌保健医療大学の研究倫理審査委員会の承認を得た（承認番号 017003）

(3) (1)(2)の結果から小規模ケアホームの質を保証するケアマニュアル開発に向けて検討した。

4. 研究成果

(1) デンマークの視察と講演会の開催

デンマークの視察

2017 年 9 月にデンマーク、ボーゲンセにあるノーフュンスホイスコーレの短期研修部に 2 日間の研修を受講した。デンマークの福祉、政策及びペタゴギックについてと認知症コーディネーターの役割の講義と保育統合施設、高齢者集合住宅と地域看護クリニックを視察した。

デンマークは世界一幸福な国と言われており、税金は高いが国への信頼度や政治への関心度が高い。ケアの面では、医療と福祉の垣根がなく、地域包括ケアを実践し、ケアは地方自治体で提供している。できないことを評価するのではなく、できることを評価する、手を差し伸べるのではなく、手を背中に回しできるように支援しているというケア方法であった。

ペタゴギックとは、「究極の個別ケア技術」のことであり、人が成長し、社会生活を身につけていくときの哲学であること。ペタゴギックを実践するためには、多方面にアンテナを張り、相手に歩み寄っていく力と対象者が何を求めているのかを察知する力が必要であり、認知症の個

別ケアにも有効な手法であるということであった。このペタゴギックの手法を身につけた人をペタゴと呼び、ペタゴは、保育や幼児教育のための施設、精神障がいや知的障がいのための施設で働いている。幼少期から自己尊重感を身につけることを大切にし、どんな問題に遭遇しても立ち上がれる力を持ち添えた大人に成長できるような接し方で教育方法を実施しており、「ペタゴギック（究極の個別ケア技術）」は、幼少期から一人の人間として対等な立場に関わることから始まっていると考えられた。

講演会の開催

2018年にノーフュンスホイスコーレから講師を招き「デンマークの福祉、認知症ケアとの向き合い方」の講演会、さらに翌年の2019年に全国ホームホスピス協会の理事長とホームホスピス開設当初のデンマーク在住の介護士を招き、「ホームホスピスのケアについて」と「究極の個別ケア技術」の講演会を地域の医療・介護従事者、市民を対象に開催した。講演会における「究極の個別ケア技術」では、事例提示で利用者に寄り添った個別性のあるケア実践のための指標となりえた。

(2) ホームホスピスの質を担保するための取り組みと課題からケアの本質を明らかにする

管理者インタビュー

管理者5名は、40代から70代であり、看護職が3名、介護職が2名であった。いずれも医療現場および介護現場での経験が豊富であり、教育にも携わった経験もあった。インタビューでは、149のコードから23のサブカテゴリー、さらに12のカテゴリーが抽出され、3つにラベル化された。『病院と在宅ケアの違いを感じる』『生き方を尊重した魅力あるケアの実践』『普通の生活を営む』『疑似家族で生活する』の4つのカテゴリーから「ホームホスピスへの思い、大事にしていること」とラベル化され、我が家ではないが、我が家と同じような環境で、利用者一人ひとりの生き方を尊重した生活を大切にケアしていることが分かった。手を差し伸べすぎる濃厚な病院ケアへの課題も抽出されていた。『経営方針の確立』『地域の特性を熟知』『スタッフの意欲を引き出す』『サービスの特徴を把握し、利用する』の4つのカテゴリーから「経営・運営」とラベル化され、地域でホームホスピスの運営を継続していくために、地域の特性を熟知し、地域に根差し、地域への開放性・公共性への配慮を重要視すること、さらにスタッフには、介護・医療の職種に関係なく相互理解と協働を求めている。経営面から大組織とは異なるため、経営戦略や報酬面での課題、外部サービス利用の可否の課題があった。『モデルを示し、モチベーションを上げる』『介護と看護の協働する力』『理論・思考過程を抑え、スタッフの能力を引き出す』『スタッフの力を信じ、守る』の4つのカテゴリーから「スタッフの教育」とラベル化され、スタッフの力を信じスタッフを全面的に後方支援で守り、スタッフの意欲を引き出すための工夫や管理者自らモデルを示すことで経験だけのケアではなく、理論を用い、ケアに至った思考過程を抑えるなど、根拠を持ったケアに力をいれていた。介護と看護とのアセスメントの違いに課題があるが、それぞれの得意分野を生かせるような配慮を管理者は行っていた。

スタッフインタビュー

スタッフ13名は、30代から60代であり、看護職が3名、介護職が10名であった。看護職は、病院や老人保健施設等で経験を積んでおり、介護職は、介護士になる前に、事務職や幼稚園教諭等を経験や両親の介護の経験などから介護福祉士等の資格を取得していた。インタビューでは、215のコードから41のサブカテゴリー、さらに18のカテゴリーが抽出され、3つにラベル化された。『管理者（開設者）の信念』『ホームホスピスに興味を持った』『望ましいケアのスタイル』『誘いや勧めがあった』の4つのカテゴリーから「ホームホスピスで働くようになったきっかけ」とラベル化され、スタッフがホームホスピスで働きたいと思ったのは、ホームホスピ

スの理念やビジョンがはっきりしており、ホームホスピスのケアに興味を持ったことであったと考えられる。『情報を共有し、ケア方法を考える』『家族の希望も取り入れる』『認知症があっても制限せず見守る』『普通の生活を営める』『業務の流れではなく、利用者の気分に合わせて』『食べることを重視する』『小さな変化に気づき、対応できる体制づくり』の7つのカテゴリーから「入居者へのケアの工夫・気を付けていること」とラベル化され、スタッフ間で情報を共有し、入居者が当たり前の普通の生活を営めることや食べることを重要視していた。さらに家族からの情報や希望を取り入れ、ケアにも参加できるように気を配ったり、小さな変化にも対応できる体制を整えたり、入居者の生活と命に寄り添い、責任のあるケアを行うための工夫をしていると考えられる。『ケアの基本、ロールモデルを示してもらえる』『医療に頼らない介護を考えると可能』『人間らしさを取り戻せる当たり前の生活ができる』『ホットできる優しい空間である』『利用者と家族の思いに寄り添い、理解する』『心地よく最期まで安心して過ごせる』『地域の重要な社会資源』の7つのカテゴリーから「ホームホスピスへの思い、入居者へのケアに対する思い」とラベル化され、スタッフは、管理者が示すケアの理論やロールモデルに共感し、自らもその方法を学び、その人らしさを取り戻したいとケアを実践しており、結果的に終の棲家となるような心地の良い居場所づくりを目指していた。何等かの理由で病院にも施設にも入院・入所が叶わない方の受け皿として、地域において重要な社会資源になっていると思われる。

(3) 小規模ケアホームの質を保証するケアマニュアルの開発に向けて

ホームホスピスの管理者およびスタッフインタビューからラベル化された内容とペタゴギックの「究極の個別ケア技術」と既存の「ホームホスピスの基準」を参考に小規模ケアホームの質を保証するケアマニュアル開発には、「個別ケア技術の意識化と徹底」と「小規模ケアホームの開設者や管理者のゆるぎない理念とビジョン」と「スタッフと管理者との信頼関係」が重要であることが示された。この3点を軸にラベル化された内容を更に細分化し、マニュアルを検討中である。スタッフインタビューで食べることのケアが重要視されており、食に関連した口腔ケアのリーフレットを作成した。

インタビューデータ分析に時間を要し、小規模ケアホームにおける質保証可能な実践的ケアマニュアルの完成には至っていないが、現在、地域の有識者と共に小規模ケアホームにおけるケアが実践可能な施設を探索中であり、研究と実践を今後も継続していく。

引用文献

内閣府：平成 28 年度高齢社会白書

<http://www8.cao.go.jp/kourei/whitepaper/w-2016/gaiyou/pdf/1s1s.pdf>

内閣府：高齢化の状況

http://www8.cao.go.jp/kourei/whitepaper/w-2014/zenbun/s1_1_1.html

村上紀美子：社会的生活を導く哲学と手法 歩み寄って、見極め、個別ケア，コミュニティケア,Vol,17,No.01,2015

ホームホスピス推進委員会、ホームホスピスの基準、一般社団法人全国ホームホスピス協会、図書出版木星舎 2015 総ページ数 16

岡本双美子，兼行栄子：ホームホスピスで働くスタッフの死生観と終末期ケアに対する認識の変化,死の臨床，Vol.37,No1,119-124,2014

宮島渡、千葉忠夫、デンマークの高齢者介護理論に学ぶ、NO.4,vol.11、2006、414-419

千葉忠夫、世界一幸福な国デンマークの暮らし方、PHP 研究所、2009 総ページ数 206

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計1件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 長内さゆり
2. 発表標題 小規模ケアホームの質を担保するための取り組みの現状と課題
3. 学会等名 日本在宅看護学会
4. 発表年 2020年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	村松 真澄 (MURAMATSU MASUMI) (50452991)	札幌市立大学・看護学部・准教授 (20105)	